



小学生の短歌教室

伝統的な言語文化に親しむ

副読本

発行：2011年11月
発行：2014年11月(第2刷)
編集・発行：群馬県立土屋文明記念文学館
協力：高崎市立土郊小学校
参考：今野寿康
作じてみちうり
「詩たてみちうり」
「わくわく短歌」
(平成22年) 徳成社

短歌の五七五七七の三十一音を三十一文字と厚ぶつとがあります。はじめの五七五を「上の句」、後の七七を「下の句」といいます。五七五はそれぞれ「初句」「第二句」「第三句」「第七句」「第八句」「第九句」といいます。音が多いため「字余り」「字足りない」「字足りない」「字足りない」短歌一首は、この五七五七七の間に空けたり行を変えたりしないといけないのでつなげて書くことが基本です。

土屋文明の短歌を讀む

群馬が生んだ歌人・土屋文明(一八九〇ー一九九〇)

土屋文明は、群馬県西群馬郡上野村(今の群馬県高崎市保渡田町)に生まれ、「アフリギ」という短歌のグループのリーダーとして活躍した歌人(短歌を作る人)です。日本で一番古い歌集(短歌などの歌を集めた本)である『万葉集』の研究も熱心に行いました。文化勲章を受章し、群馬県名誉県民になり、百歳まで長生きしました。

県立文学館ホームページ「土屋文明ってこんな人」を見ると、その人生がよく分かります。



つちやぶんめい
土屋文明

文明の短歌を一首だけ讀む、詞書1冊を讀む、歌集1冊を讀む…

短歌が一首だけで発表されることは、ほとんどありません。雑誌に数種から数十首へつづいてまとめて発表され、それが後で歌集にまとめられる場合がほとんどです。(マンガがはじめ雑誌に発表されて後で本になると似ています。)

歌集の中では、いくつかの短歌をまとめて、その前に「詞書」と呼ばれる、状況を説明する言葉や文章が入ります。短歌には、一首だけ抜き出して讀む魅力もあれば、詞書、歌集といった単位でまとめて讀む魅力もあるのです。

特徴のある一首を讀むとしよう

土屋文明(第三歌集)「山谷集」(一九三五年)

「小工場に酸素溶接のひらめき立ち砂町四十町夜ならむとす」

こぢいじょうこうじょうに ひらめき立ちの ひらめきたち すなまちじょうちやうりやまのらんとす(七八六九七)

【意味】小工場に酸素溶接(の光)がひらめきたち、砂町四十町は夜にならうとしよう。

※砂町は東京都東部の地名で、東京市城東区(現在の東京都江東区)にありました。その中の地名「四十町」は今の江東区東砂町目のあたりです。東京の下町の小さな工場で、金属を高い温度にして溶かしてつなぎあわせる「溶接」作業をしているところを詠んだ短歌です。土屋文明には、こうした工場などの機械的なものを詠んだ短歌があって、これは当時、かなり新しいものでした。



1冊の詞書に続く短歌を全部讀むとしよう

1冊の詞書の後に続く短歌のまとまりである「1種」をすべて讀んでみることにしよう。

土屋文明の第九歌集『青南集』(一九六七年)の中で詞書「私注稿」に続く五首

※「私注稿」という詞書は、文明が『万葉集私注』という本(全二十巻)の原稿を書き終えた」という意味です。

『万葉集私注』は、万葉集について文明が自分の意見を述べた本です。



【私注稿】「私注稿」は、文明が『万葉集私注』という本(全二十巻)の原稿を書き終えた」という意味です。『万葉集私注』は、万葉集について文明が自分の意見を述べた本です。

鉄ペンも得難き時に書き始め錆びてペンの感覚今に残れり

てつぺんも えがたきときに かきはじめ さびしへのかんかく いまにのこれり(五七五七七)

【意味】この「私注」は鉄ペン(ペン先が鉄でできた万年筆)を手に入れることが難しかった時に書き始めた。(新しいものを買えなかったのでさびたペンで書き続けた。その感覚が手に今も残っている。)

浅葱の枯れて野びるはかじかまり舌が腰抜ける二月近へ

あさぎのかれてのびるは かじかまり あがしぬける こがしちかじく(五七五七七)

【意味】(ネギの一種)アサギが枯れ、ノビル(という植物)が寒くてかじかんだまじつになり、私の腰が抜ける二月が近へ。

年々の足が立たなくなる二月恐れつゝのひやいを履けり

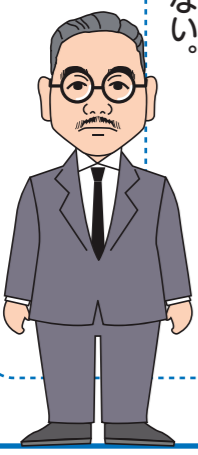
としとしの あしたたなくなるにふりおそれつゝのひやいをかきわす(五七五七七)

【意味】毎年足が立たなくなる二月が心配で、(世)話がでまぬくなるひやいがなごり(ひ)のひやいを履けり(ひ)はなご。

金柑の貝殻虫を落したり温かき日はただたのこへ

きんかんの かいがらむしを おとしたり あたかきひは ただたのこへ(五七五七七)

【意味】キンカンについたカイガラムシを落としたりして(過)暖かい日はただたのこへ。



「私注」を書きつづけた文明の普段の生活の中に深く入り込んでいることが、その時間の厚みのよけなものが伝わります。一首一首は地味な歌集を讀む流れの中での、少しづつこの魅力を感じていくことが出来るのです。

